

小 学 校

道 徳 の 指 導 資 料

第 3 集

(第 4 学 年)

1 9 6 6

文 部 省

375.3
M7533s6



719334

まえがき

児童の道徳的な判断力や心情をつちかい、実践的な意欲を高めるためには、児童が心から興味を覚え、感銘を受けるとともに、その思考を深め、豊かな情操を育てるような具体的な教材によって指導することが、最も効果が高いと考えられる。

従来、このような適切な教材の選定に困難を感じている教師が多く、そのため道徳の指導内容の充実を期しがたいうらみがあった。

文部省としては、その要請にこたえるため、昭和38年7月の道徳教育の充実に関する教育課程審議会の答申に基づき、昭和39年に「道徳の指導資料」第1集を、ついで昭和40年には第2集を編集刊行して、道徳教育の充実向上を図ってきたが、このたびさらに豊富な教材を提供し、あわせて前2集の内容を補う目的をもって、本年本書を刊行することとした。

本書には、前2集の場合と同様に、各種の指導案や、古今東西にわたる名作、童話、伝記などの読み物資料、説話資料、視聴覚教材等、各学校における道徳指導のための参考例が集録されている。各学校においては、本書刊行の趣旨をじゅうぶん理解され、創意とくふうをもってこれを活用し、学校の実情にふさわしい道徳教育の充実を図られるよう期待してやまない。

終わりに、本書の編集にあたって、終始熱心に御協力くださった方々に対し、衷心から感謝の意を表するしだいである。

昭和41年3月3日

文部省初等中等教育局 初等教育課長
西 村 勝 巳

4-11 海のはたけ

I 指導案

1 主題名 海のはたけ

2 主題設定の理由（省略）

3 ねらい

いつも研究的な態度をもち、疑問や不明な点は最後まで明らかにし
ようとする気持ちを育てる。

4 展開の概要

(1) 過去の生活の中で、もっと調べてみたいと思った経験について話
し合う。

○学習の中でもっと調べてみたいと思ったことはなかったか。

- ・稲の成長について。
- ・各地の人々の暮らしのくふうについて。
- ・海への生物について。

○毎日の生活の中で調べてみたいと思ったことは。

- ・そうじを早くやる方法について。
- ・鳥小屋の当番がきちんとできるようにするには。

○それをなぜ途中でやめてしまったのだろうか。

- ・考えただけだった。
- ・調べていく計画がなかった。
- ・最後までやろうという気持ちが欠けていた。

(2) 読み物「こんぶのおんじん」を読ませて話し合う。

○山田文右衛門は、いつごろの人か、またどこの人か、何をしていたか。

4-11 海のはたけ

○文右衛門は、どんなことに気がついたか。

- ・すりばちのかげらにはえたこんぶ。
- ・こんぶのはえ方。

○文右衛門は何をどのように調べたか。

- ・海の深さ。
- ・こんぶのはえる場所。
- ・潮の流れ方。
- ・はえているもの。
- ・雨の日も、風の日も。

○文右衛門は何をしたか。

- ・長い間研究して、石を海へなげこんだ。
- ・失敗にもくじけない。
- ・ほかの人から笑われてもやめない。

○文右衛門のおかげでどうなったか。

- ・たくさんのこんぶ。
- ・みんなが食べられる。
- ・海の野菜。

(3) 今後、学習や作業のとき、どのようにしたらよいか話し合う。

○ものごとになぜかという疑問をもつことはないか。

○自分の好きなことで最後まで調べてみようということはないか。

○研究ノートなどを活用できないか。

5 指導上の留意点

(1) 展開(1)では、不思議だ、知りたいと思うことを自由に発表させる
が、こどもの生活に身近なもので、実現可能なものに目を向けさせ
る。

(2) 展開(2)では、根気強さよりも、真理の探求により強く目を向けさ
せていく。

(3) 日本のこんぶの生産高のうち、北海道の占める割合などを示す資料を用意する。

Ⅱ 資 料

こんぶのおんじん

—山田文右衛門の話—

<前 略>

北海道の函館のちかくで、りょうしをしている山田文右衛門という人がありました。

まい日、ふねにのって、さけや、にしんをとったり、魚のとれない時には、こんぶをとって、くらしをたてていました。

ある日のこと、ふねにのって、北海道の南の海で、りょうをしていた文右衛門は、ふと、海のそこに、みょうなものを見つけて、おもわず、はっとしました。

ふかさ3メートルばかりの海のそこに、だれがなげすてたのか、すりばちのかけらがおちていて、そのかけらから、長いこんぶが8、9ほんもはえて、ゆらゆらと、なみにゆられているのです。

「これはおもしろい。わしはこれまで、こんぶというものは、海のその岩にだけしか、はえないものだと思っていたのに、これで見ると、すりばちのかけらからでも、りっぱに、はえるのだ。そうだ……」

文右衛門は、なにごとか、考えついたらしく、うれしそうに、その日はかえっていききました。

すりばちのかけらに、はえたこんぶを見つけてから、文右衛門は、まい日、海にふねをうかべて、こんぶのはえている海のふかさや、そのばしょの、しおのながれなどを、ねっしんにしらべはじめました。また、

「すりばちのかけらに、はえるこんぶなら、石にも、はえるにちがいない。」

どんな石がよいかと、いろいろしらべはじめました。雨の日も、風の日も、きりの日も文右衛門の、このしらべはつづきました。

そして、長いあいだかかって、とうとう文右衛門は、どんなばしょがよいか、どんな石がよいかということを、すっかりしらべあげました。

いよいよあくる年、文右衛門は、5そらのふねに、石をたくさんつんでいって、前にしらべたばしょへどぶんどぶんと、なげこみました。一つなげこむたびに、この石にこんぶがはえるぞ、こんぶがたくさんとれるぞ、と、おもいながらなげこんだ石のかずは、みんなで2万7千もありました。

そのつぎの年には、5万あまりの石をなげこみました。ところが、その時、きょ年なげ入れた石は、どうなったかと思って、海のそこをのぞいて見ましたが、こんぶどころか、なんにもはえていません。

手つだいの人たちは、みんなわらって、

「文右衛門さん、いくら石をなげこんだって、こんぶなどが、はえるものですか。むだですから、およしなさい。」

といって、とめるものさえありました。

「いや、そのうち、きっとはえる。」

文右衛門はそういって、それからまい年、こんきよく、石をなげこんでいました。

いつのまにか、4年たちました。

文右衛門はことしもまた石をなげこもうと思って、海へ出かけていきました。すると、どうです。いちばんはじめの年に、なげこんだ石から、りっぱなこんぶがはえて、ちょうど、川に、ぬのをさらしたように、ゆらゆらと、ゆれているではありませんか。そのこんぶのあいだを、小さな魚が、うれしそうにおよぎまわって、まるで、りゅうぐうじょうのようでした。

「やあ、できた、できた。」

文右衛門は、ふなばたをたたいて、よろこびました。

文右衛門は、さっそく、そのこんぶをとって、

「これは、海のはたけでとれたこんぶです。」といって、函館のおぶぎょうさま(今の知事のような役人)のところへもっていきました。おぶぎょうさまも、たいそうめずらしくおもって、それを江戸のしょうぐんさまのところへおくりしました。

それからのち、みんなが文右衛門のまねをして、海のそこへ石をなげこみ、こんぶのはたけをつくるようになりました。いまでも、北海道でやっています。そして、ひとりでに、はえるこんぶとあわせて、日本じゅうや外国へ、どしどしおくり出しています。こんぶのおんじん、山田文右衛門の、とうとい、くしんのおかげです。(久米元一作)

大木雄二ほか著 美しい話三年生 金の星社

4-12 一生の仕事

I 指導案

1 主題名 一生の仕事

2 主題設定の理由 (省略)

3 ねらい

不幸な人をいたわり、進んで助けようとする親切な心を養う。

4 展開の概要

(1) 読み物「みなし子の父」を静かに読んで聞かせる。

(2) 石井十次とその妻品子の人をがらを中心に話し合う。

○石井十次、品子のしたこと、心を打たれることはどんなことか。

- ・きのどくな人たちに食事を与えたこと。
- ・不幸なこどもを自分の家にひきとって世話をしたこと。
- ・不幸なこどもの世話を一生の仕事にしようと決心したこと。
- ・こどもたちにはいもがゆを与え、自分たちは水をのんで過ごした日もあったこと。
- ・妻の品子の協力。

○石井夫妻はどんな心の持ち主だろうか。

- ・困っている人を見ると助けないではいられない。
- ・たとえ自分は苦しくても、がんばって不幸なこどもを助ける。

(3) 自分たちにできる愛の手のさしのべ方はないか、みんなで考えてみる。

○学校の友だちに対して。

- ・弱い者や、困っている友だちがいたら、みんなで助けてあげる。